

小学校低学年を対象とした 発達障がい理解に関する絵本の評価とその効果

学校教育学専攻
臨床心理学コース

M10067I

和田成美

1. はじめに

発達障がい児に対する効果的な支援方法は、これまでに数多くの研究がなされてきた。しかし近年、定型発達児に対する支援の必要性が高まっている。通常学級だけでなく学童保育においても障がい児の受入れ人数が増加し、発達障がい児と定型発達児との関わりが課題となっている。

学童期における障がい理解教育では、身体障がいなどの理解教育が多く、発達障がいの理解教育は少ない。対象に関しても中・高学年が多く、低学年は少ない。この理由として、発達障がい児が「不可視的な障がい」である点と低学年の言語能力が未発達である点に関係している（水内，2005）。

ことばの理解が十分でない幼児に対する障がい理解の促進に有効的な手段として、絵本が用いられるが、発達障がいに関する理解のための絵本はまだまだ少ないのが現状である。

そこで本研究では、発達障がいの特性を個性と捉え、低学年に対する絵本の読み聞かせが個性理解の促進に有効か検討することを目的とする。

2. 予備調査

目的：(1)発達障がいを取り扱った絵本の収集、
(2)絵本の評価指標の検討

対象：絵本を扱う出版社 26 社と大型書店

時期：2010 年 12 月～2011 年 1 月

手続き：各出版社にメールと電話にて問い合わせを行った。また、大型書店の店員に尋ねた。

結果：(1)全部で 13 冊の絵本が収集され、紙芝居や障がい分類名が書かれたものを除く以下の 4 冊を選定対象とした。①『ぼくはゆうくん』、②『おいでよルイス！』、③『たっくん』、④『十人十色なカエルの子』。(2)絵本の評価指標には、谷口・徳田（1997）の分析観点を基に〔内容・製本・絵〕の 3 カテゴリーからなる 10 項目を作成した。

3. 研究 I

目的：(1)4 冊の絵本について、児童に関わる人から意見と評価の収集。(2)研究 II で使う絵本の選定。
対象者：50 名（小学校教員，特別支援学校・学級担任，保育者，養護教諭，定型発達児の保護者，発達障がい児の保護者，当事者の 7 グループ）

時期：2011 年 3～6 月

手続き：4 冊の絵本について、個別インタビューを半構造化で実施した後、評価指標の項目を質問紙にて評価した（7 件法）。

結果：(1)発達障がい児の主人公の視点から描かれた絵本と、主人公のクラスメイトからの視点を含む 2 者関係が描かれた絵本の 2 種類があった。また、職種の専門性によって着目点に違いがみられた。(2)評価指標の平均点から『たっくん』を研究 II で用いることとした。

4. 研究 II

目的：低学年に対する絵本の読み聞かせが個性理解の促進に有効かどうかを検討する。

対象者：1～3年生の児童 152名

校種	規模	1年生	2年生	3年生	合計
A学童	大規模学童	13	7	8	28
B学童	小規模学童	4	3	2	9
C学童	小規模学童	5	4	1	10
D学童	小規模学童	3	10	4	17
E小学校	通常学級	29	29	30	88
合計		54	53	45	152

<グループ編成>A学童とE小学校は15人グループを、B～D学童は3人グループを編成した。それぞれに対象絵本群とダミー絵本群を設定した。

時期：2011年8～10月

材料：『たっくん』（平林あゆ子 監修，2011年発行，風間書房）

手続き：読み聞かせの効果測定には、自作のアンケート（4択）を用いた。アンケートは全部で11問設定されており、その内6問が個性理解に関する問題であった。事前アンケートを実施し、約1週間後に読み聞かせと事後アンケートを実施、さらに約3週間後にフォローアップアンケートを実施した。ダミー絵本群には『たまごがいっぱい』（山本省三 作・絵，1993年発行，ひかりのくに）を読んだ。

<仮説>

- ① ダミー絵本群より対象絵本群の事後アンケート得点が上がる。
- ② 15人グループよりも3人グループの事後アンケート得点が上がる。
- ③ 学童よりも通常学級の事後アンケート得点が高くなる。

結果：事後アンケートにおいて、対象絵本群の得点が上がったが、フォローアップアンケートにおいて差が見られなくなったことから、読み聞かせによる一時的な効果はあるものの、3週間後には維持されないことが分かった。校種別にみると、学童では読み聞かせの効果がみられなかったが、通常学級の2年生にのみ効果がみられたこと

から、担任の声かけが児童の取り組み態度に影響している可能性が考えられた。また、質問項目別にみると、対象絵本の内容に対応した質問のみで事後アンケート得点に読み聞かせた絵本による差が認められたことから、低学年には具体的な内容の提示が入りやすいことが明らかとなった。

5. 総合考察

絵本の読み聞かせは誰でも手軽に行うことが出来るため、学級担任や学童指導員が日常的かつ継続的に取り組むことが可能である。研究Ⅰと研究Ⅱの結果から、絵本によって描かれている視点や関係性・テーマに違いがあるからこそ、実際の場面において読み聞かせを行う場合には、取り扱いたいテーマを含んだ絵本を選択することが必要であると考えられる。そして読み聞かせの際には、指導者が児童の注意が集中するような適切な働きかけをすることで、低学年に対する絵本の読み聞かせを効果的に活用することが出来るのではないかと考えられる。

6. 今後の課題

本研究における課題として、アンケートの質問項目の妥当性が挙げられる。また、本研究ではアンケート得点と日常場面との比較にまで及ばなかった。これは、担任や指導員からの第三者評価によって今後検討可能であると考えられる。さらに、通常学級において部分的な効果が認められた要因を踏まえて、通常学級と同様に周囲児との関わりが課題とされている学童場面における効果的な活用方法についても、今後検討していく必要があると考えられる。

主任指導教員 有園博子
指導教員 有園博子